あなたの願いを叶えます2―サンプル―

ドアの横に掛けられたネームプレート。『マサト・佐久間』と書かれた文字を確認し、ノックをしてからドアを開ける。

「おはようございます」

佐久間はすでに中にいた。

「おはようございます。すみません、遅かったですか」

少し早めに出たつもりだったのだけれど、ビルに入る直前に電話が来てしまって時間を取られていたのだ。

「いえ、大丈夫ですよ」

パートナーである黒服、佐久間が黒いフルフレームのメガネを直しながら言った。今日も髪のセットはばっちりで、ウェット感のある黒髪はがっちり固められている。

佐久間は同性のマサトから見てもかっこよかった。すらりと長い足。身長も高く、シルエットは細身。けれど筋肉はしっかりとついているようで力持ち。裸を見たことはないけれど、抱き上げられたときの安定感で鍛えているのは分かっていた。そしてその上にある小さな顔。まるで子供のときからサイズが変わっていないのではと思う顔にあるのは整えられた眉、切れ長の二重、高い鼻と薄い唇。まるで作り物のようなそこには人間らしいほくろやシミは一つもない。

「何か飲まれますか」

「いえ……準備をお願いします」

カバンをソファに置いて、佐久間の視線を浴びながら服を脱ぐ。仕事開始の時間になる前にシャワーで身を清めてもらわなければならないのだ。

マサトがこの店『あなたの願いを叶えます。』に入って一か月弱。でも普通のアルバイトのように毎日出勤するようなお店ではないので、仕事は今日で四回目だ。だからどうしてもまだ仕事前は緊張してしまう。

「……ちゃんと我慢できましたか」

「ぁ……」

上衣を脱ぎ、ベルトを外した途端に掛けられた声。このズボンの奥にある金属はもう冷たいと感じることもないくらい体温に馴染んでいた。

「……はい……」

視線を逸らして羞恥心を押し殺し、佐久間の視線を意識した途端に震え始めてしまった手を必死に動かしズボンを下ろす。

「震えてますね」

「っ……緊張、しちゃって……」

でももう慣れなければならない。それにシャワーだって佐久間に入れてもらうのだから。

「……こんなに初心(うぶ)なペニスを自由にさせるなんて」

「っ……や……」

そう、ここでのマサトの仕事はペニスの貸し出しだ。その言葉の通り、ペニスを必要とするお客さんに自由に使わせる。専用の箱に立ったまま入り、穴からペニスだけを出して、あとはただ耐えるだけ。

「さあ、早く脱いで見せてください」

「はい……」

お客さんの要望は様々だ。ゲイだけれど相手がいなくて趣味のフェラチオだけさせてほしいとか、ただペニスに頬擦りがしたいとか。今のところそういうソフトなお客さんが続いていたけれど、前回の仕事の後、佐久間に家まで送ってもらう際に「そろそろ覚悟をしておくように」と忠告をされていたので、そろそろハードなお客さんも来ることだろう。

この一週間、「ペニスに何をされてしまうのだろう」と思うと不安で、でもそのどうにかされてしまったペニスを佐久間はどうケアしてくれるのだろうと思うとひどく興奮して眠れなかった。

「痒みなどはないですか」

「大丈夫です」

ペニスの貸し出し役として契約した際に店側から提示された条件は「常に貞操帯をしておくこと」だった。仕事の前日にオナニーをしてしまっていざ射精が見たいというお客さんが来たときに出せなかったら困るから、とか、感度がいい方が人気が出るから、とか、理由は色々あるようだけれど、一応仕事としての決まりごとなのだから、と受け入れている。

そしてその貞操帯を唯一外すことができるのが佐久間だ。外見から察するに年は二十代後半、あまり笑うこともなく無駄話もしないタイプの真面目系。というか、どちらかというと冷たいとも言えるタイプ。性格が悪いとか嫌われているとかはないようだけれど。

（おちんちんの心配をしてくれるのはいかにも仕事だからって感じだし……）

下着も全て脱ぎ去れば、佐久間は目の前に膝をつきすぐ近くからペニスを覗き込んだ。そして貞操帯つきのペニスを掬い持ち、様々な角度からじっくりとそこを確認する。

「射精は？」

「していません」

「イきましたか？」

「え……いえ、だからしてませんけど……」

直近の射精はここで働くようになる前だ。休みの日でも当然貞操帯があるからオナニーはできないし、そもそもオナニー禁止の契約だから射精なんてしていない。なのに佐久間は毎回こうしてペニスを観察しながら同じことを訊いてくる。

「お尻は弄っていないんですか」

「いえ……」

このお店ではアナルを使う契約の人もいると聞く。一番ハードなのは恐らく獣姦。でも獣姦可のボーイは何人もいると聞いているので、きっと犬相手でもよくなるくらいアナルは気持ちいい場所なのだろう。

「したくなりませんか」

「……いえ……」
興味がないと言えば嘘になる。でもアナルなんて排泄する場所だし、調べてみたらどうやら洗浄をするのが大変そうだったので、そこまでして経験してみたいとは思わなかったのだ。
「そうですか。では貞操帯を外しましょう」
「はい」
前回のプレイは頬擦りだった。一時間くらい、穴から出したペニスにただひたすら頬擦りされ続けるだけの仕事。この店の中ではかなりソフトな仕事のようだったけれど、正直かなりきつかった。だって入店から二週間、一度も射精できていない状態で一時間も頬擦りされ続けたのだ。
そもそも穴からペニスを垂らすというのがもういやらしくて、それだけで興奮してしまっていたのに与えられたのは頬擦りの刺激だけ。当然そんな刺激では射精なんてできるはずもなく。苦しくて苦しくて、もっと強い刺激がほしいのに、拘束された状態では身体を揺らすことすらできなくて。箱には毎回佐久間も一緒に入ってくれるのだけれど、途中立っているのすらつらくなって、後ろから身体を支えてもらった程だった。
でもそのお客さんが帰った後、佐久間は優しく丁寧にペニスを洗ってくれたのだ。それが何だかすごく嬉しくて。それまで佐久間を意識したことなど一度だってなかったのに、身体を支えてくれた男らしい腕が忘れられなくなってしまった。でも洗い終えた後は皮の中までしっかりと拭かれ、そしてまた貞操帯を嵌められた。
「……っ、ぁ、ごめんなさい……」
だからこうして佐久間にペニスを解放してもらっただけで勃起してしまうのは仕方のないことだ、と思っている。
「いえ、もう三週間以上射精していませんから」
佐久間がこのつらさを分かってくれたらいいのに、と思うけれど、やはり佐久間の声に同情の色はない。ただ淡々と事実を述べられているだけだ。
「……あの、水で洗ってください」
「分かりました」
このままでは洗われている間に射精してしまいそうだった。しかしそんなことになったらこの後の仕事に影響するし、何より佐久間と気まずくなってしまう。これからもどちらかが辞めるまではパートナー関係を続けていくのだから、そんなことにはなりたくなかった。
立ち上がった佐久間の後に続いて専用のシャワールームに入る。そこはいつでも清潔で、何より温かい。
「寒くありませんか」
「大丈夫です」
きっと佐久間が手入れをしてくれているのだ。マサトが出勤して来る前に、浴室暖房のスイッチを入れておいてくれている。確認していないので確証はないけれど、それでいい。
「どうぞ座ってください」
「失礼します」

どこまでも他人行儀。ちらりと他のペアの様子を見たことがあるけれど全然こんな風じゃなくて、気を遣い合いながらも笑って楽しそうに話していた。それが羨ましい、と少しだけ思う。

「お願いします」

悲しいけれど、佐久間との関係が変わりそうな気配はない。それはまだマサトが入店したばかりだからというわけではなくて、佐久間はただ「仕事」に来ているだけで、同僚と仲良くなるということを不要と捉えているタイプのように見えるからだ。単に「仕事」。だからふらつけば支えてくれるしペニスの炎症がないかも気に掛けてくれる。そしてそれはマサトの身体を心配しているのではなくて、単に商品を気にしているに過ぎない。

「っ……」

冷たいシャワーがペニスに降り注いだ。かなり冷たい。でもきっと、ぬるま湯に近い水では勃起してしまうと佐久間も分かっているのだろう。

「痛むところは」

「大丈夫です」

マサトのペニスは仮性包茎だ。剥けば亀頭は露出するけれど、放っておけば隠れたまま。この場にいる以外の時間は全て貞操帯がついているので剥くことはできなくて、だから排泄も皮を被ったまま、そして風呂でも洗うことができないので恥垢はひどいことになっている。

「擦ります」

「はい……」

つらい時間だ。それでなくても包茎で敏感な亀頭を親指の腹で擦られるのだ。水で冷やされているとはいえ、それは見ているだけでもつらい。せめて自分でしたいと以前頼んだことがあったけれど、それは簡単に却下されてしまった。

「欲望に抗えず、そのまま射精してしまったら困りますので」というのが佐久間の返事だった。それを聞いたらもうそれ以上粘ることもできなくて、結局こうしてつらい時間を受け入れ続けている。

「……運動でもしましたか」

「え？」

「少し恥垢が多いようです。汗を掻いたのかなと」

「っ……」

普段の恥垢量を覚えているのかとか、そんなことをよく淡々と訊けるなとか。他にも言い様のない羞恥とか聞き間違いだと思いたいという身勝手な欲望とかが頭をぐるぐる回って黙り込む。

「マサトさん」

「ぁっ……すみません……」

そうだ、きっとこの確認も仕事の一部なのだ。

「最近暑かったので……それでだと思います」

汚くてすみません、とペニスを擦られながら頭を下げる。

「いえ、謝ることはありません。まだお若いですから新陳代謝も良いのでしょう」
何と答えたらいいか分からず、また「すみません」と頭を下げた。そして佐久間ももうそれ以上は何も言おうとはしなった。
次に口を開いたのはそれから五分後。これは手持ち無沙汰でずっと壁の時計を見ていたので確実に正しい数字だ。
「恥垢が取れました。流します」
「……ありがとう……ございます……」
感じそうになる度に冷水を掛けられていたペニスはすでに感覚を失いつつあった。更にここでまた冷水で流されれば、洗浄が終わる頃には真っ赤なペニスの出来上がりだ。
「あっ……、っくぅ……」
掛けられたのはやはり冷水だった。まるで肌を刺すような温度のそれがペニスを流す。
「っあ、っぐ……」
「もう少しです」
「っ……は、いっ……」
痛い。冷た過ぎて痛い。でも仕事だから耐えるしかない。
それは擦られているときよりも更に長い時間に感じられた。でも進んだのは二分。いや、二分も冷水をペニスに受け続けたのだから褒められてもいいくらい。
「痒いところはありませんか」
「いえ……」
もう感覚すらないと言ってしまいたかった。でもそんな失礼なことは言えなくて、大丈夫です、と頭を下げる。
「洗っていただいてありがとうございました」
「いえ」
仕事ですから、と音のない言葉が続いていた。それが悲しくて。
「……あの……」
「はい」
「いえ……」
もう少し普通に話してみたい。でも話題も見当たらなくて、黙ったままタオルで身体を拭いてもらう。これも前に自分ですると言ったけれど却下されたことだ。そのときの理由は確か「拭きながら恥垢の残りがないか確認しますので」だった。万が一恥垢が残った状態でお客さんの前に出てしまったらと思うとそれも怖くて、結局こうしてされるがまま。
「不快感はありませんか」
「いえ、とてもさっぱりしました。ありがとうございます」
少しずつ体温を回復し始めたペニスがジンジンと脈を打ち始めている。本当は最後くらいお湯で温めて欲しかったけれど、早いうちに体温が完全に戻ると、こうして拭いてもらうだけでも起ってしまうだろうから仕方がない。
「そろそろ時間ですね」

「はい……」
あと十分程で仕事の時間だ。しかしお客さんの要望については何も知らない。予約があることは知っているけれど、他のことは一切何も。
渡されたお茶を飲み、それからバスローブを着て時間になるのを待つ。この無言の時間が一番つらい。
「……あの」
「はい」
「今日の内容って……」
「申し訳ありませんがお伝えできません」
「……すみません」
だろうな、とは思っていた。これも以前、同じように却下されていたのだ。ちなみに理由は「今ここで話して、怖いから無理だと言われたら困るから」だった。それを聞いたときは「つまり怖くて逃げ出したくなるような内容のプレイもあるということだ」と怖くなったけれど、それから今まで一度も痛い思いをしていないことを考えると、考え過ぎだったのかなとも思ったり。
「……そろそろ行きましょう」
佐久間が腕時計を見て言った。この職場で配られているという特別な時計だ。どうやらネットか何かで繋がっているようで、電話するほどではない通知は全てその画面に表示される。スマートウォッチのようなものらしい。
「はい……」
立ち上がると軽い眩暈がした。緊張だ。緊張のしすぎで眩暈がしたのだ。
佐久間がドアを向いていたのは幸いだった。体調不良ではなくただの緊張による眩暈に、わざわざ心配する素振りをさせなくて済む。
佐久間の背後でそっと深呼吸を繰り返しながら廊下を進んだ。

「どうぞ」
「失礼します」
宛てがわれているのは何の変哲もない六畳ほどの部屋。お客さんの中には「穴から出ているペニスを眺めていたいだけ」という人もいるらしく、部屋の中にはソファとテーブル、お茶の入った小さな冷蔵庫が置かれている。そしてその向かいにあるのが今からマサトと佐久間が入る箱だ。
「どうぞ」
「はい」
バスローブを脱がせてもらい箱に入る。緊張する。でももう入ったからには出られない。箱のサイズはマサトより大柄な佐久間の肩幅ギリギリ。二人入ればいっぱいで、マサトは振り返ることすらできない。
（多分、逃げないようになんだろうな……）

こうして黒服が一緒に入るのは、暴れたり逃げたりさせないためなのだろうと思っている。佐久間はマサトが入った後で箱の中に入るので、箱――というより個室と言うべきか――のドアを塞ぐようにして待機するのだ。後ろに人がいると思えば身をよじるのも難しいので、必然的に穴からペニスを抜くこともできなくなる。

「さあ、ペニスを出しましょう」

「はい……」

背後から手が伸びてくる。そして手探りでペニスを抓まれ穴に通される。

「痛みは」

「大丈夫です」

もうシャワーの冷たさによる違和感もない。あるのはただ、期待と興奮と恐怖だけ。

佐久間が身体を固定する間はじっと息をひそめるようにして身体を静止させておく。腰と、手足。箱と言っても完全な真四角の箱ではなくて、身体の凹凸に合う形になっているので体勢がつらくなるということもない。

固定が終わるとあとはもう無言だった。狭い箱の中で互いの息遣いだけが聞こえる。

（やば……）

すぐ近くに感じる佐久間の体温。そして前回身体を支えてもらった感触を思い出す。

（っ……や……）

だめ、と思うのに身体が熱くなってきてしまう。

「どうかしましたか」

「っ……」

耳に掛かる吐息。近い。

「マサトさん」

「い、いえ……」

話し掛けてくるということはまだお客さんは入室していないということだ。一体いつ入室してくるのだろう。佐久間は腕時計で分かるのだろうが、マサトにはそれすら分からなくてただひたすら緊張ばかりが高まっていく。

「大丈夫です……」

落ち着かせないと更に勃起してしまう。お客さんが入ってくる前から起たせているなんて恥ずかしい。

「……確認します」

「えっ！　あっ……」

佐久間が箱から出て行った。ペニスを見に行ったのだ、と分かる。

（恥ずかしいっ……）

穴から勃起したペニスだけが出ている状態。外から見たらすごくおかしな光景だろう。でも今それを見られてしまっている。

どうせ確認するのなら見なくても触ってくれれば、と思うけれど腰を突き出すようにして固定されているので指を入れる隙間もない。だから仕方ない、とも思うのだけれど、そもそ

も勃起の確認をする必要はあるのだろうか。
「……勃起してますね」
佐久間はすぐに戻ってきた。まじまじと観察されたわけではないのがせめてもの救いか。
「ごめんなさい……」
「今日のお客様はきっとすごく驚かれるでしょうね。……あ、いらっしゃいますよ」
ヴヴ、という小さな音が聞こえた。恐らく佐久間の腕時計だ。きっと入室を知らせる合図なのだろう。
（勃起っ……）
結局萎えないまま、カチャ、という控えめなドアの音が聞こえた。
コツ、コツ、という革靴の音が近付いてくる。
「……ああ……」
「っ……」
勃起したままのペニスに風があたった。すぐ近くにいる。吐息が感じられるほど近くに。
「……もう起ってるのか」
聞いたことのない声だった。それほど年配ではない。三十代か、四十代か。
「ひぁあっ」
突然何かがペニスに触れた。乾いたもの――指だ。
「……ふむ……勃起しても自分では剥けないのか」
「ぁ……」
包茎だと言われると、感じてしまうのに。
「ん？　聞こえているのかな」
「ぁっ……」
恐らくこちら側の声は聞こえていないはずだ。よほど大声を出せば聞こえるとは聞いているけれど、防音素材なのでほとんど聞こえないと聞いている。なのにこうして外の声が聞こえるのは、機械を通しているとは思えないほどの高音質マイクで拾っているからだ。
「……ふむ……いやらしい陰茎だ」
陰茎――その聞きなれない響きにドキドキする。
「ぁ……」
指はさっと離れた。もう触れられてはいない。でも熱いほどの視線を感じる。
「……さてどうやって可愛がろうか」
「ぁ……ぁ……」
見られていると思うだけで感じてしまう。まだ何もされていないのに。何をされるかすら分からないのに。大切なソコを、逃げようもない状態で曝している。その恐怖心が興奮に変わっていく。
「……うん、しばらく見ていよう。聞こえているなら、なるべく長時間勃起を維持しなさい」
はい、と返事をしても意味はない。なので暗い箱の中でぎゅっと目を瞑って頷く。
「……ああ、とてもいい陰茎だ。言葉では返せないから揺らしてお返事をしてくれているん

だね」
「あっ！」
ペニスの先端、皮の窄まった部分を抓まれた。そしてすり、と抓んだ二本の指をスライドするように擦られる。
「……うん……皮の余りもすごいな。これでは普通には人に見せられないだろう」
「ぁ……そんな……」
ひどい。でも確かに初めて見せたのは佐久間だし、それ以降は顔も知らないお客さんにしか見られていない。だって恥ずかしくて見せられない。
「ああ、頷いてるのか。そうか。そうだろう、こんな恥ずかしい陰茎、誰にも見せられない」
「あっ……」
頷いている、というのは刺激を求めてぴくんぴくんと揺れるペニスのことだろう。恥ずかしい。
でも、もっと言ってほしい。
（もっとっ……）
もっと辱められたい。男としての矜持を馬鹿にされたい。
なのに男の気配が遠ざかっていく。
「やっ……」
もっと近くで見てほしいのに。余った皮の長さを測るとか、一度剥いて亀頭を眺めてみる――でもそのまま手を離して、皮が勝手に亀頭を覆ってしまう様子を笑うとか、そうして集まった先端の皮をどこまで伸びるのかと引っ張って遊んでみるだとか。
ハードなことをされると聞かされ怯えた気持ちも本物だった。でもいざこうしてお客さんに見られると、隠していたいはずのマゾヒストな本当の自分が顔を出す。
「やぁ……」
もっと見て。もっと虐めて。でもそれはお客さんには届かないし、今は自分が楽しむのではなくお客さんに楽しんでもらうための時間だ。
「……うぅ……」
耐えるしかない。でもきっと、この分だと今日も射精はできないだろう。そしたら次の仕事までまた一週間、勃起すらできない毎日に苦しむことになる。
（イきたいっ……）
もうイきたい。長い禁欲でもう身体は限界だった。
「やぁ……やああ……」
勝手に声が漏れる。だって泣きたいくらいの気分だった。でもペニスは萎えないし、お客さんも勃起を維持しなさいと言っていた。だから必死にいやらしいことを考える。どうせ射精もできないのに。興奮すればするほど苦しむことになると分かっているのに。
（ん……）
目を閉じて、外から見た今のペニスの状態を想像する。平らな壁から出たペニス。毛はないし、しっかり出せるように腰を押し付けた状態になっているので根元から先端までの全て

が丸見えになっていることだろう――亀頭を除いて。
そしてそのペニスは勃起している。完全に勃起しているくせに皮は剥けなくて、先端に余った皮をぴょこりとさせているのだ。
（それから……）
きっと刺激を求めて震えているだろう。射精したくてしたくて、でもさせてもらえなくて。ただこうして指示のまま勃起を維持し続ける可哀想なペニス。
（あぁ……）
これのどこがソフトな仕事なのだろう。いや、そろそろ始まるハードなプレイというのはまさにこれのことなのかもしれない。
すでに射精欲は限界だというのに、こんなことをこれから先もずっと繰り返されたらきっとおかしくなってしまう。でも辛いと言いながら、きっと自分は退職しようとはしないだろう。つらいつらいと泣きながら、それでも終わりの見えない焦らしを受けるためにこの箱に入りペニスを垂らす。
（いや……）
もしかしたらもう今後「垂らす」ことはないかもしれない。毎回勃起させて、穴から出すのにも角度を考えて腰を下から上に押し付けるようにして出さなくてはならないかもしれない。
しかもそれは、後ろにいる佐久間にしてもらうのだ。勃起を持たれて、穴から出してもらう。毎回勃起が続いていたら、佐久間は何と言うだろう。
（……何も言わなそう……）
ただ無言で、冷たい水で冷えたペニスをもう一度冷やすかもしれない。それこそ冷たいタオルや保冷剤なんかで。そして早めに箱に入り、お客さんが来る頃にペニスの体温が戻るようにするのかもしれない。
（……されたい……）
そんな扱いもされてみたい。「また勃起ですか」なんて呆れられながらペニスの世話をされてみたい。
「んっ……」
ぴくん、とペニスが揺れるのが分かる。でもお客さんは何も言わないし、何もしない。きっと箱から飛び出した勃起をただ眺めているのだろう。
（やぁ……もう……）
つらい。きつい。イきたい。扱きたい。扱いてほしい。イかせてほしい。射精したい。精液が先端から飛び出す瞬間を見ていてほしい。
「……やぁ……やだぁ……」
こんなにつらい仕事なんて。この仕事に就いたときは、ただペニスを穴から出しておけばいいのだと思っていた。給与が高額なのは単にペニスをどう扱われてしまうのか分からない恐怖心への対価だとばかり思っていた。でもこんなにつらいなんて。せめて自宅での貞操帯がなければいいのに。そしたら自分で射精もできるし、仕事中に射精を強く望むこともない。

（ああ……）
箱の中は真っ暗で、そして当然時計もない。佐久間は腕時計をしているし、恐らくお客さんが退室する時間の情報なども知っているだろう。でもそれはこちらは知ることができなくて、だからただ終わりの分からない興奮と絶望に耐え続ける他ない。
（まだなの……）
せめて何かしてもらえたら。少しだけでも触ってもらえれば退屈がしのげる。いや、退屈というか、この何とも言えない時間が嫌だ。だって色々なことを考えてしまう。今のペニスの状況とか、これから一体何をされてしまうのか、とか。
（それに……）
背中に感じる佐久間の体温。ぴしっとスーツを着ているから体温は伝わらなさそうなものなのにしっかりと意識できてしまうのは、きっと微かなコロンの匂いと息遣いが伝わってきているからだろう。
（うう……）
もしここに一人で入っていたら、そしたらどんな気持ちになっていただろうか。もしかしたらこんな風には勃起を維持できなかったかもしれない。きっと一人だったら興奮や恐怖よりも退屈が勝ってしまう。今退屈だと感じないのは佐久間がいるからだ。後ろにいてくれているから。一人じゃないから余裕があるのだ。
（でも長い……）
体感だけでなく、実際にも結構な時間が経過しているように思う。でもお客さんは何も言わないし、しない。もしかして音もなく退室してしまっているのではと思うほどだ。
少しずつペニスが萎えていく。当然だ。刺激も何もないのだから。精神的な興奮をいつまでも長引かせることは難しい。
次第に肩からも力が抜け、ペニスも完全にくたりと垂れた。そして聞こえてくる、足音。コツ、コツと近付いてきているのが分かり緊張が走る。
「……萎えたな。さあ、もう一度勃起させてごらん」
男の指が先端の余った皮を抓んだ。そして先程と同じように、指を擦り合わせるようにして刺激される。
「あっ、あっ」
気持ちいい。しかも擦られるだけでなく、軽く引っ張ってペニスを持ち上げようとされているから皮が伸びて少し痛くて。それがまた気持ちいい。上に引く力がまるで強引に勃起させようとしているみたい。
（僕の勃起が見たい……？）
そう思うと興奮する。でもきっと勃起したら男はまた離れてしまうだろう。そして正面に置かれたソファに座ってペニスを眺めるのだ。それを何度も繰り返される。
「あっ、あっ」
男が望んでいるであろうプレイが分かってきて、半ば絶望的な気持ちになっているというのに、それでも久しぶりに刺激をもらえたペニスは喜んで形を変えた。意味がないのに……

頭ではそう分かっているのに、ペニスはそれを分かってはいない。
「ああっ……」
「うん、これでいい。私はずっと見ているからね。見られていることを意識して勃起を維持しておきなさい」
お客さんの口調は優しい。それがまた、命令に強さを持たせていた。
（ああ……）
指が離れ、そして気配も遠ざかる。もっと触っていてほしい。でも勃起を維持しなければ。
（いやらしいこと……）
色んなことが思い浮かぶけれど、何を想像してもやはり一番いやらしい状況なのはこの現実だ。過去に観たどんなゲイビデオよりもいやらしい。だって穴から出している。大切なペニスを無防備に穴から出して、そして興奮させて。それを見られていると分かってまた興奮して。でも箱の中には佐久間もいて、背中には胸が当たっている。まるで都心の通勤ラッシュみたいな距離。恰好だってスーツだ。なのにマサトだけが全裸で、ペニスを突き出す状態で身体を固定されている。

〜〜〜〜

「いらっしゃいます」
「……はい」
カチャ、という軽い音が聞こえた。それからコツコツという足音も。そういえばここにはカーペットが敷かれていないんだな、と気付いた。控室や廊下にはカーペットが敷かれているのに。
「ああ……可愛いペニスだ。もう勃起してる……期待していたのかな」
聞いたことのない声だった。
「可愛いなぁ……でもごめんね、今日は勃起されるとちょっと困るんだ」
「え……？」
首を横に振り、佐久間に意見を問う。
しかし、佐久間は何も言ってはくれなかった。諦めて顔の位置を戻しペニスの感覚に意識を集中させる。
「……準備の間に萎えるかな……」
どうやら独り言のようだ。
ドサ、という床に何かを置くような音が聞こえ、それからファスナーを開く音。何が始まるのかが分からず怖い。
「や……」
怖い。今まで玩具や機械を使われたことは一度もない。皆勃起を観察したり、フェラチオをしたりと軽いものばかりだった。
（あ……もしかしてハードなもの……？）

少し前に、そろそろハードなものが来るだろうと聞いていた。でも前回は結局ただ勃起を維持させ、それを観察し続けるだけというハードなのかソフトなのかよく分からないプレイで終わってしまった。今回、もしかしたらついにハードなものが来てしまったのかもしれない。

一気に恐怖心が芽生え、ペニスが力をなくしていく。

「ああ、萎えたね。よかった」

こんな風にお客さんが口にすると、後ろにいる佐久間にまでペニスの状態を知られてしまうので恥ずかしい。でもさすがに今はその程度の羞恥で勃起はしそうにない。

「……よし……」

ペニスの状態については言及するくせに、お客さんは今からすることについては何も声に出してくれなかった。それが怖い。何をされるのかが全く分からない。

無言のまま、カチャカチャという金属音だけが聞こえてくる。緊張が高まり、身体が熱くなっていく。

「よし」

もう一度聞こえた「よし」。一体何の準備をしているのか――「あっ」と勝手に声が出た。萎えたままのペニスを握られ、皮を剥かれたのだ。

「ぅぁっ……」

さっき佐久間に剥かれ、戻してもらったばかりの皮。丁寧に洗ってもらった亀頭。同じ場所を、お客さんが弄っている。

「すごい……濃いピンク色だ……」

感嘆の声。それから指のようなもので亀頭を擦られた。

「ああ……ああっ」

指のような動き。けれど感触が指ではない。ゴム手袋か何かだろうか。見えないというのがこんなに怖いなんて。

「……うん、よし」

先程から何度も繰り返される「よし」。一体何を確認しているのか全く分からない。目を閉じて、更にペニスの感触に集中する。

「ぁ……ん？　何……？」

尿道口に添えられた硬いもの。プラスチックだろうか。それがぐっと尿道口を押した。

「ああっ」

痛みはない。けれど何か液体が尿道口から注入されている。

「あ、あああっ！　はいっ、入るっ！」

ローションだろうか。でもまさかそんなところに入れるなんて。

「これくらいかな……」

先程聞こえた「よし」とは正反対の不安げな声。そして感じる、先程のものとは違う恐怖。

尿道口から堅いものの感触が消えると、今度はまた別のものが押し付けられた。冷たくもなく、先程のような硬さもないように感じる何か。

「あ……何……？」
ここで声に出してもお客さんには聞こえない。それに佐久間も何も言ってはくれない。寂しい。せめて手を繋ぐとか、慰めの言葉をくれるとかがあったらいいのに。そしたら頑張れるのに。
「……あっ？　あ……嘘っ……あ、痛いッ！」
佐久間のことを考えると心が沈む。けれど次の瞬間、何かが尿道に挿し込まれた。痛い。硬い。少なくとも液体ではない何か。
「ああっ！　痛いっ！　痛いッ！」
身体が揺れる。でも腰を引こうにも、拘束ベルトが邪魔をして逃げることができない。
「あああ！　痛いいい！」
そうしている間にも尿道にはゆっくりと何かが入れられていく。
「あああああ！　あああああ！」
痛い痛い痛い。もしかしたら今日は射精できるかも、なんていう考えは頭の中から吹き飛んでいた。もうとにかく早く終わってほしい。このまま引き抜いて、今すぐペニスを手で包ませてほしい。必要なら医務室に駆け込みたい。だってこんなに痛いのなんて知らない。
「あああ！　あああああ！」
きっとペニスも揺れているはずだ。なのにお客さんは手を止めない。
「あああああ！　痛い！　おちんちん壊れる！　壊れるううう！」
頭の中にはペニスが内側から裂かれるシーンが浮かんでいた。痛い。想像すると余計に痛くなると分かりながら、壁の奥に差し出したペニスは実際にそうなってしまっているのではないかと不安でたまらない。
「……マサトさん」
「あ……」
掛けられた小さな声。縋るような気持ちで顔を横に向けるが、やはり拘束された身体では佐久間が見えるところまで振り返ることはできない。
「痛いですか」
「痛いっ！　痛いですっ！　おちんちん裂けちゃうっ！」
そうだ、そういえば佐久間は今何が行われているのか知っているはずだ。内容も終了時間も、全て。
「助けてっ」
そして今この状況でここから出てお客さんにストップを掛けられるのも佐久間だけだ。けれど佐久間は動こうとはしなかった。
「頑張ってください」
前は欲しかったはずの「頑張って」という言葉。なのにちっとも嬉しくない。
「やあ！　無理、無理ぃいい！」
もう頑張れない。だってこれ以上頑張ったらペニスが壊れてしまうから。
「……ん？」

箱の中に響いたお客さんの声。咄嗟に口を閉ざし、お客さんの言葉に意識を向ける。
「やけに暴れるな……痛いのかな……あ！」
挿入をしていた動きが止まり、ペニスを抓まれた。でもまだ中のものは抜いてもらえないし、抓まれても勃起なんてしそうにはない。
「まだ早かった！　ごめんね……麻酔がまだ効いてなかったね」

〜〜〜〜

数秒もすればかちゃりと音が聞こえた。お客さんが入ってくる。緊張の一瞬。
「ああ……勃起してる」
「ぁっ……」
また聞いたことのない声だった。
「すごいな……本当にちんこが出てる……」
ペニスに感じる視線。当たる吐息。そして、指先が皮を抓んだ。
「……うん……いいね、皮もちゃんと余ってる」
「ぁ……あ……」
皮を抓まれ、軽く引かれる。痛みは感じない程度の、軽い刺激。
「……まずは伸ばそうかな」
(伸ばす……?)
皮のことだろうか。怖い。
「ぁ……怖い……」
佐久間は無言だった。それは以前と変わらない。でも、腰に添えられていた手に微かに力が入るのが分かった。
「まずは……二十くらいかな……」
一体何の話をしているのだろう。全く言葉を発さないお客さんも怖いけれど、こうして断片的に与えられるというのも怖い。
「ちょっと痛いよ……ごめんね」
思わず身構えた瞬間、激痛。
「ああああああああああああああ」
皮が、恐らくクリップに挟まれている。
「痛い！　痛いいいいいい！」
「これでよし……とりあえず……三分かな」
「ひぎいいいい！」
さっきの「二十」は錘の意味だった。挟まれた皮に重みを感じる。ずっしりと、錘で下に引き伸ばされている。痛い。クリップに挟まれたところも、強引に引き伸ばす重みによる痛みも、きつい。
「ああああ！」

「マサトさん……」
耳元に寄せられた唇。大好きな声と体温なのに、今はそれさえ癒しにはならない。
「あああ！　痛い！　おちんちん取れるっ！」
重い。皮がちぎれてしまう。
「……ああ、萎えたら皮がもっと余ったな……うん、結構伸びてる。これならいいか」
三分経ったのだろうか。クリップが外され、ペニスが一気に軽くなった。でもジンジンと尾を引く激しい痛みは全く消えない。
「これなら麻痺してるかな……」
抓まれた皮。くり、とねじられると軽い痛みが走る。
「ああ……痛いぃ……」
「……よし」
続いて聞こえてきたのはカチャカチャという金属音。一体何が始まるのか分からず怖い。もしまた尿道だったら――あの痛みは本当にもう二度と体験したくない。
（怖い……怖い怖い怖い……）
何をされるのだろう。怖い。でも麻痺していると言っていたから例え痛いことでも痛みはあまり感じないかもしれない。
ぎゅっと目を閉じて衝撃に備える。すると何か冷たいものが皮に触れた。冷たいタオル……いや、布か紙だろうか。感触としては佐久間が使ってくれるお尻拭きに似ているような気がするけれど。
最初冷たいと感じたそれは布が離れるとスーッとしてから刺激が消えた――消毒だ、とそれで分かった。ペニスの皮を消毒されたのだ。そんなところに消毒をする理由は一つしか思い当たらない。
「あ、うそ……や、やだ、こわいっ、や、」
「マサトさん……」
佐久間は内容を知っているのだ。少し掠れた声は小声だからなのか、それとも同情しているからなのか。
「や、佐久間さんっ」
何かがペニスに触れた。挟まれている。
「や、やだっ！　嫌っ！」
お客さんは黙ったまま。でも何度か「挟む何か」の場所を変え、そして――。
ガシャン！

約５万２千文字です。
宜しくお願い致します。